

# 顔画像を用いた自己の主観年齢の推定 —若年視傾向の規定要因に関する考察—

Estimating one's own subjective age using facial images :  
An investigation of the factors determining the perception of ourselves as younger

藤澤隆史<sup>1)</sup>、宮本直幸<sup>1)</sup>、長田典子<sup>1)</sup>、井口征士<sup>2)</sup>

Takashi X. FUJISAWA<sup>1)</sup>, Naoyuki MIYAMOTO<sup>1)</sup>, Noriko NAGATA<sup>1)</sup>, Seiji INOKUCHI<sup>2)</sup>

E-mail : fujisawa@ksc.kwansei.ac.jp

## 和文要旨

本研究では、前報の主観年齢推定に関する実験から得られたデータに対して、新たな手法の適用を試みた。具体的には、評定者ごとの主観年齢を算出するために、得られたデータに対して非線形回帰分析を適用し、各パラメータの推定を行った。それぞれの評定者について算出した主観年齢シフト値を、性別と年齢層によって分類し、それらを独立変数として二要因分散分析を行ったところ、性別および年齢層それぞれについて有意な主効果がみられた。その結果、男性は女性よりも、若年層は中年層よりもそれぞれ自己を若年視する傾向にあることが明らかとなった。前報では、主観年齢に見られる自己の若年視傾向の要因を特定することができなかったが、本研究の結果、自己と他者の顔情報における非対称性の要因と、地位や自信などの社会心理的な要因の2つの要因であることが明らかとなった。

キーワード：顔画像、主観年齢、実年齢、非線形回帰分析

Keywords : Facial images, Subjective age, Real age, Non-linear Regression analysis

## 1. はじめに

人は対面的なコミュニケーションにおいて、顔や声などのノンバーバル情報を手がかりとして、性別や年齢など他者の多様な属性について推測を行なっている。年齢はその中でも、社会的地位や役割と関連して、人が社会生活をおくる上で重要な情報を担っていると考えられる。特に、他者が初対面である場合などにおいては、相手の年齢を正しく推定し、その関係性に相応しい態度や行動を示すことは、重要な社会的スキルであると考えられる。

しかしながら、われわれは、後に相手の年齢を知った時に、「もっと年上だと思っていたのに…」などと必要以上にへりくだってしまい、年齢推定を誤っていたことに気づくということをしばしば経験する。著者らはこれまでに、これは相手の年齢推定を誤ったのではなく、自己の年齢を実年齢

よりも若く知覚しているために引き起こされた現象であると仮定することで、これらの問題にアプローチしてきた [1]-[3]。具体的には、まず被験者に実際の対面的なコミュニケーション状況と同様に、提示された他者の顔画像について相対的な年齢判断課題（年上か、年下か）を行ってもらい、得られた評定値の分布データから、「主観年齢」として定義される定量的な値の算出を行った。

しかしながらこれまでの方法では、主観年齢を算出する際に、集団データに対して線形近似直線をあてはめ、そのパラメータを推定したため、評定者群ごとの推定精度を定義することができなかった。そのため評定者群間の要因分析に関する議論が行えないという欠点があった。そこで本研究では、線形近似直線の代わりに、非線形単回帰分析を導入し、集団データに対する近似ではなく、評定者ごとに主観年齢の算出を行った。これによ

<sup>1)</sup> 関西学院大学 理工学研究科、Graduate School of Science and Technology, Kwansei Gakuin University

<sup>2)</sup> 宝塚造形芸術大学 メディアコンテンツ学部、Faculty of Media Contents, Takarazuka University of Art and Design